

## 不満、不安を分かち合おう

標題は毎日新聞 7 月 28 日「論点 相模原殺傷 1 年」の熊谷晋一郎・東京大先端科学技術研究センター准教授の発言。先日聴いた講演を思い出しながら書きとめた。



事件直後、人とすれ違う時に恐怖心を抱いたり、車椅子に乗った満員電車で「疎ましく思われていないか」と考えたりしました。排除され、悪意を向けられているという感じでした。容疑者が障害者福祉に関わっていたことや、(優秀な者にだけ存在価値を認める)優生思想的な論理によって、半世紀にわたる障害者自立運動の積み重ねが否定され、時計の針を巻き戻されるような感覚を覚えました。

こうした危機意識を薬物依存者の自助グループの友人と共有し、昨年 8 月に事件犠牲者の追悼集会を開きました。……その後、当事者が議論する場も作ろうと考えました。議論を積み重ね、障害者や依存者が排除されない社会を実現するためには「現時点で何がベストプラクティス(最善の方法)か」を確認する作業です。知的障害の当事者や支援団体と議論をしたり、介助者の追い詰められた状況に関して研究を始めたりしています。

背景には「多数派の人々が抱える不満と不安」という問題があります。人々の暮らし向きが厳しくなり、不満や不安を高めている状況下で、さまざまな事件が起きています。苦しみの吐き出し方を見つけられず、自分の困りごとの起源を冷静に探るのではなく、障害者や移民などの少数派の弱者に攻撃的になっているのです。

自分の困りごとをユーモアを持って他人と分かち合うという意識が根付いていないことが問題です。人間は誰しも理想通りにはいかない現実を生きていて、愚痴を言いつつ、仲間と人生を分かち合って生きているものです。しかし、事件からは、理想と現実のずれを受け入れられない人間の怖さが伝わってきます。

分かち合って生きる文化を支える土台が分配の仕組みです。分配には、社会への貢献度に応じて個人が分配を受ける「貢献原則」と、個人が生きていくために必要なものを無条件で分配される「必要原則」があります。貢献原則の比重が大きくなると、人々は「自分には価値がある」と証明し続けなければなりません。こうなると余裕がなくなり、分かち合いながら生きることはできなくなります。

事件では、加害者、被害者、施設の入所者家族のいずれにも「頼れる人が少ない」という共通点がありました。頼れる人が少ない状況は、暴力につながる条件です。例えば、仮に介助者が 1 人しかいなければ、介助者との関係が険悪になった時、障害者には逃げ場がありません。現実問題として、障害者を受け入れる地域の「受け皿」は不足しています。だからといって、事件が起きた状況を許容するわけにはいきません。障害者が暴力を振るわれない未来をいかに作り上げるか。障害者の家族も一緒に考えていくことが大事です。

(2017 年 8 月 3 日)